

[原 著]

日本におけるシンクロナイズド・スイミングの受容過程に関する研究 —浜寺水練学校における能島流泳法に着目して—

藤 丸 真 世*

(2007 年 5 月 7 日受付, 2007 年 7 月 2 日受理)

A Historical Study on Reception Process of Synchronized Swimming in Japan —Special Focus on ‘Nojima-ryu Swimming Style’ in HAMADERA Swimming School—

Michiyo FUJIMARU

Purpose of this study was, clarify a reception process of synchronized swimming in Japan. Therefore I examined an action of Hamadera swimming school and examined “Nojima-ryu swimming style” taught at school.

A summary of the chief results of the present study are as presented below.

1. In 1906, Mainichi Shimbun established Hamadera swimming place and a beach. In 1922, Hamadera swimming place was renamed to Hamadera swimming school. In the school of “Japan style of swimming” taught in Hamadera swimming school, “Nojima-ryu swimming style” was the center. In addition, a style of swimming came to be taught with modern styles of swimming such as the crawl.

2. In 1925, the Narao Matsumoto which was a teacher of Hamadera swimming school got a hint from an American movie, and an original idea did “Gakusui Gunzo” (an underwater group performance). As for this performance, “Japan style of swimming” and modern styles of swimming were put together. For 1950 years, “music” was introduced into whistled “comfort water group” till then. The groundwork to do that I received synchronized swimming easily was fixed by this.

3. It was 1954 that synchronized swimming as a competition was introduced to Japan for the first time. In September, 1954, three players who belonged to Hamadera swimming school show synchronized swimming in front of a spectator as Japanese for the first time.

Key words: synchronized swimming, Hamadera swimming school, Nojima-ryu swimming style

キーワード: シンクロナイズド・スイミング, 浜寺水練学校, 能島流泳法

1. はじめに

(1) 研究の意図と着眼点

人種の違いがあっても新人（ホモサピエンス）としての人類の身体構造に基本的な相違はない。手足の可動範囲に違いはないし、その形態においても同様である¹⁾。したがって、人類が自らの身体を使って水を克服する技術（＝泳法）は、洋の東西を問わず少なからず共通していると見るのが自然であろう。このような考えに基づいて日本の水術として発達してきた泳法を

見てみると、西洋からやってきた泳法とは基本的なところで大きな違いが見られないといえよう。

第2次世界大戦後の昭和29(1954)年にアメリカチームが演じるシンクロナイズド・スイミング（以下、シンクロと略称）に出会った日本人は、その泳法の大半をすでに日本泳法²⁾として知っていた。しかも、日本泳法（とくに能島流³⁾）の伝道のための学校（明治39年に浜寺水練場として開設し、大正11年に浜寺水練学校に改組）において近代的な集団演技を「楽水群

* 体育史研究室

像」として実施してきたという経験もあった。すなわち、大正 14 (1925) 年に、浜寺水練学校の女子部長松本植雄がアメリカ映画に映し出された水中パレエからヒントを得て、日本泳法の伝統的な泳ぎである抜手、舞鶴、伝馬、鵜泳などを一つの流れに組み立て、同校の女子教員に笛の合図や号令で集団演技をさせたのが楽水群像の始まりであるといわれている⁴⁾。これは、アメリカのキャサリン・カーチス女史が水中パレエ団を結成し、世界貿易博覧会において初めてシンクロの前身としての「ウォーターパレー」を公開した 1934 年よりも 9 年も前のことであった。また、日本にシンクロが紹介される以前の昭和 25 (1950) 年には、浜寺水練学校師範の高橋清彦が楽水群像に音楽を導入している。こうした浜寺水練学校の活動から推し量ってみても、戦後の日本にはシンクロを導入する下地 (基礎) がすでにできあがっていたといわねばなるまい。

もっとも、浜寺水練学校以外に日本泳法を教授する組織や団体が存在しなかったわけではない。例えば、明治 29 (1896) 年に創設された大日本武徳会遊泳部では小堀流を中心とした日本泳法が指導されていた⁵⁾。同部は武徳会解散後は京都市水泳講習所として継承し、昭和 27 (1952) 年に京都踏水会となっている。ここでは競泳と併せてシンクロも指導され、多くの優秀なシンクロ選手を輩出している。しかしながら、シンクロが日本に紹介される前にすでに「楽水群像」をもっていた浜寺水練学校に対して、当時の京都踏水会にはそれに匹敵する群泳を行っていた形跡は見られない。したがって、京都踏水会を黎明期の日本シンクロ界を牽引した浜寺水練学校と同列にとらえることはできまい。

また、アメリカチームが日本に初めてシンクロを紹介した昭和 29 (1954) 年の時点では、浜寺水練学校のほかにも東京 (ワカパ会の「音楽水泳」) や名古屋において「群泳」なるものが行われていたとされている⁶⁾。しかしながら、浜寺水練学校ではそれ以前に「楽水群像」の段階を脱して「シンクロ」に着手していた経緯を認めることができる。

ひとたびシンクロが紹介されると、日本の水泳界は見事にこれを受容し、即座に国際水準まで達するが、当時中心となって活躍したのは浜寺水練学校の所属選手たちであった。このように、日本のシンクロ史を語るうえで浜寺水練学校の存在は看過することができず、同校で教授されていた能島流泳法をして日本におけるシンクロの受容を容易ならしめたといっても過言ではなからう。

そこで本研究では、日本におけるシンクロナイズド・スイミングの受容過程を明らかにすべく、浜寺水練学校の取り組みやそこで教授された能島流泳法に着

目し、同校がいかにしてシンクロを受容する下地を整え、その上に立って実際にシンクロを導入していったのかを素描することにしたい。とりわけ、本研究では能島流における泳法 (= 技法, 技術) に重点を置いて、シンクロに「技術史」的なアングルから検討を加えていくものである。

本研究に先行する関連の諸研究を眺め返してみると、本研究のように日本におけるシンクロの受容過程を技術史的な観点から分析した研究は管見では皆無に等しい⁷⁾。そこで、先行研究の検討の対象を「日本におけるシンクロの歴史」について記述されているものにまで広げてみると、これまでに主として松沢洋子⁸⁾、中野成章⁹⁾、日本水泳連盟シンクロ委員会¹⁰⁾、斉藤中子¹¹⁾、元好三和子¹²⁾の論稿が著されてきたことがわかる。しかしながら、これら諸研究の内容は通史的なレベルでしかなく、この分野に関する本格的な研究はいまだ行われていないといわねばならない。

(2) 泳ぎの「技術史」研究の視点

本研究でいう「技術史」とは、岸野雄三・多和健夫によって編まれた『スポーツの技術史』(大修館書店, 1972) における岸野の見解によっている。本書はその「まえがき」において「新しいスポーツ史の企画を具体化したものである。」¹³⁾と位置づけられているように、この分野の先鞭をつけた研究であった。岸野は「正しく目的にむかって経済的に動く経過において、運動は技術と関連してくる。」という理解のもと、「スポーツの技術」=「スポーツの運動技術」としてとらえ、「運動とは、運動経過のことであり、運動技術とは、客観的な『運動経過の合目的形態』である」と解している¹⁴⁾。

このような視座に立脚するとき、異なる地域や文化から生じた「日本泳法」と「シンクロ」の泳ぎに共通点が見いだせるという事実には、理解を示すことは困難ではない。なぜなら、速さを追求するでもなく、水中に浮んで様々な動きを披露するという点では両者の目的はかけ離れてはおらず、そこにおける「運動経過の合目的形態」がほぼ同一の「技術」であったとしても何ら不思議はないと考えられるからである。

確かに、能島流を含む日本泳法は、元来武術として発生したものであるので、その意味では当初は軍事的な目的に適う泳法が生み出されていたものと思われる。しかしながら、近世という「泰平の世」において武術は武芸化 (= 芸道化) し、シンクロと同じく人に見せることを前提とした「芸」の道を歩んでいったのである。その意味で、日本泳法とシンクロの泳法は、「人に見せる」という目的に対して類似した「合目的形態」を有していたと見るべきであろう。

そもそも、人間の運動がその生物学的所与性の許容

する範囲内でなされていることを考えれば、冒頭に記したように「泳ぐ」という行為そのものに少なからぬ共通項が見いだせるといえる。事実、日本泳法における「抜き手」という泳法は、近代泳法としての「クロール」に類似しており、能島流の基本泳法も「平泳ぎ」そのものであると見てよいのである。しかしながら、異なる文化において醸された「泳ぐ」という行為に各々の目的に適った共通の要素がいくら見いだせたとしても、それは、ある目的に対する妥当な泳ぎ方として、最終的に到達すべき定まった形態（＝泳法）が存在していることを必ずしも意味するものではない。このことについては、この分野の専門家である金子明友の「運動の定型化現象」に関する指摘を以下に引いておきたい。

「一般妥当的な構成要素によって成立している技術は『現在においては』という時間的制約をうけるをえない。新しい技術が開発された瞬間に今まで王座についていた技術は端に追いやられるか、否定され排除されることになる。そのための唯一の判断基準はその運動の正しい認識のもとに認められた『成果』(sportliche Erfolge) にあり、よりよい成功をおさめることのできた新しい技術はたちまちその時代を風靡する。スポーツ技術は不変のドグマではありえないのである。』¹⁵⁾

金子の指摘を踏まえて見るならば、日本泳法と欧米の泳法（シンクロ）はその原初の頃より同形態を保ってきたというよりも、各々が独自の研鑽の上に次々と新しい技術を開発し続け、やがて近代という時代を迎えて双方の泳ぎが出会った際に類似した形態に達していたと見るべきであろう。本研究では、以上で述べてきたような検討のための視点ないし諸前提に基づいて論を展開していくことにしたい。

2. 浜寺水練学校における能島流泳法とその近代性

(1) 浜寺水練学校の概要

① 浜寺水練場（学校）の開設

明治39(1906)年7月1日、毎日新聞社は日露戦争の勝利記念事業として南海電鉄沿線の浜寺に海泳練習所（浜寺水練場）と海水浴場（浜寺海水浴場）を開設した。水練場設置の趣意は、英国にならって海事思想の育成と青少年男女に海に親しませようとするにあったという¹⁶⁾。

浜寺水練場の開設当時、水泳は武術（＝水術）であるという認識が一般的であり、水泳を享受する者も少数であったが、開設初年にすでに1,172人（1日平均出席者は百数人）の生徒が集まったと伝えられてい

る¹⁷⁾。以下に、水練場発足時の規則と教課内容を掲げておきたい¹⁸⁾。

水泳練習場規則

- 第1. 当場は模範的水練術を速成的に教授するを目的とする。
- 第2. 当場は7月1日に始まり、8月31日に終わる。
- 第3. 授業は連日（日曜休みなし）午前10時から午後5時までとする。但し雨天または風浪荒い日は休場する。
- 第4. 課程はつぎのとおり。
初級＝水泳心得、水泳初歩、平泳ぎ練習。
中級＝水泳練習、抜き手（一つ掻き）、伝馬泳ぎ、いな飛び、瓜むき、枯木流し、捨浮き、いかだ流し、溺者救助法、その他高等水練術。
- 第5. 本場内で臨時競技会を開く。その日は前もって掲示する。
- 第6. 当場は何人にかぎらず練習を許す。但し年齢は満9歳以上であること。
- 第7. 練習しようとするものは次の練習願書を差し出すこと。
（「練習願書」の文面はここでは割愛する一引用者注）
- 第8. 練習中授業料を要しない。但し浴衣は持参しなさい。
- 第9. 不品行またはいたづらをするなど、教員の命に従わないものは退学を命ずる。
- 第10. 毎日、入場の際は必ず到着簿へ記名のこと。
- 第11. 教員の許可なくして警戒線以外に出てはならない。
- 第12. 授業開始および閉場の際には、号令笛を用いるのでその指揮に従うこと。

上記の「水泳練習場規則」を通覧すれば、当初の浜寺水練場の様子をを知ることができる。後に、浜寺水練場は浜寺水練「学校」と改称されるが、これは学校というよりは、夏季に集中して行われる「スイミングスクール」であったととらえることも可能である。なお、女子部の指導は年長者の男子教師が行っていたというが、明治41(1908)年には浜寺初の女性教師が誕生している点は注目される。当時の日本における女性の遊泳について、『浜寺水練学校60年史』は次のように振り返っている。

「わが国の女子の遊泳は九州島原地方の女子の遠

泳、志摩の海女の潜水などが古くから知られ、その他沿海地方の漁師の女が習慣で泳ぐくらいで、女子が水練場にはいって正式に水練を学んだのは、明治三十九年に開設された浜寺水練場がはじめてである。京阪神地方で婦人の遊泳者という、浜寺水練場で初級を修了した六人で、当時ではビッグニュースのうちにはいった。」¹⁹⁾

こうしたことからすれば、浜寺水練場(学校)は女性が運動することに懐疑的であった社会にあって、女性の水泳界進出に一役買っていたことになり、同校をして女性競技としての「シンクロ」が採り入れられていったことは決して偶然ではなかったといえる。しかしながら、男女が入り混じって海水に浸ることは、当時の風潮からして前向きには受け止められなかった。浜寺水練場も「明治四十年に男女『混浴』は好ましくないと批判され」²⁰⁾ たという²¹⁾。

② 浜寺水練「場」から浜寺水練「学校」への改称

大正 11 (1922) 年、「大阪毎日新聞社浜寺水練場」は「大阪毎日新聞社浜寺水練学校」となり、本山彦一社長が初代校長に就任した。これは、ただ単に名称が変更されたということを意味するのみならず、これを機に中尾 保師範が中心となって卒業生だけの教師陣が編成されたことをも意味していた。このとき、教授内容に対しても改めて検討が加えられ、従来の小池流の泳法指導から転じて、中尾 保師範が多田一郎より能島流を教わり、能島流を中核に据えた教授内容へと変更されたのである²²⁾。この間の事情について、能島流第 19 代宗家の高橋清彦は次のように記述している。

「浜寺水練学校は、明治 39(1906) 年の創立であるが、当時は浜寺海水浴場のなかに水練場として発足し、教師陣はこれより先の明治 25 (1892) 年に小池友正の高弟・本間秀次郎が大阪堂島川に開いた本間水練場の門下生を中心に結成された浪速游泳同志会員であったので、発足当初は日本泳法としては小池流が中心であったが、2 年後の明治 41 (1908) 年に、能島流第 17 代宗家の多田一郎が顧問として招かれ、以後大正時代に入ってから、ときどき浜寺に来了。宗家直接の指導であったので、その後は能島流を中心に小池流とともに研鑽されてきた。」²³⁾

上記の引用によって、浜寺水練学校が能島流を採り入れた経緯を把握することができる。また、浜寺水練学校は大正 11 (1922) 年に「水練場」から「水練学校」と改称するとともに学校規則を定めている。この規則の第 2 節に「教課目規定」として教授内容が詳細に明

記されているので、以下に引いておくことにしたい²⁴⁾。

第 2 節 教課目規定

〔男子部および成年部〕

〈予科〉 初級第 3 班＝平体泳法、足部動作 ⇒ 第 2 班＝浸顔呼吸停止法、浸顔平泳法(手足総合動作) ⇒ 第 1 班＝平体泳法初歩 ⇒ 予科終了試験＝200 メートル平潜水、1 メートル高飛び込み(直立、逆身、頭から飛び)

〈中級〉 2 班＝200 メートルクロール、立体泳法、潜水、横体泳法(一重のばし、片抜き手一重のばし、平体抜き一つ掻き)、浮身術、3 メートル高飛び込み(逆身)、足泳ぎ法(かもめ泳ぎ) ⇒ 1 班＝50 メートルクロール、200 メートルクロール、平泳ぎ(200 メートル)、浮身術(三体)、手泳法(伝馬表)、ハイダイブ、平体抜き手二つ掻き、5 千メートル遠泳

〈上級〉 いな飛び、背泳(100 メートル)、浮身術五体、手泳法(伝馬泳ぎ裏表)、水中作業、溺者救助法、人工呼吸法、50 メートルクロール、400 メートルクロール、1 万メートル遠泳

注意＝上の教課のほか一般生徒に修身講話、課外講話、上級生には水泳に関する学習の講習を課する。

〔女子部〕

〈予科〉 平体泳法初歩(100 メートル、ただし希望により扇足平泳ぎを教授することもある)

〈本科初級〉 平体泳法(200 メートル)、横体泳法、立体泳法、クロール初歩

〈本科中級〉 平体泳法(800 メートル)、横体泳法、50 メートルクロール、平体抜き手一つ掻き、浮身術(2 体)、飛び込み(足から飛び込む)、1,500 メートル遠泳

〈本科上級〉 手泳法(伝馬)、平抜き手、二つ掻き、投水(3 体)、いな飛び、横体泳法(100 メートルクロール)、平泳ぎ(200 メートル)、背泳(100 メートル)、5 千メートル遠泳

〔研究科〕

⇒実科＝各流派比較研究、水上競技研究、手足しかり泳法(1 段および 2 段からめ投水術および曲り眺め)、溺水者救助法、人工呼吸法および活法、

水中作業法 ⇒学科＝第1講座（遊泳史） 第2講座（遊泳術各論） 第3講座（運動生理学大意） 第4講座（遊泳に関する衛生学） 第5講座（遊泳に関する物理学） 第6講座（水上競技研究） 第7講座（遊泳術教授法）

上記の教課目規定を通覧すると、浜寺水練学校では日本泳法と併せてクロールをはじめとする競泳のための近代泳法が教えられていたことが判然とする。ここに、浜寺水練学校における日本泳法と近代泳法との融合を見て取ることができよう。また、研究科においては遊泳に関する生理学・衛生学・物理学などの「近代的」な学問が多く採り入れられており、まさに遊泳の専門的な「学校」としての体裁を整えつつあったことがわかる。

なお、浜寺水練学校が積極的に近代泳法を採用した意図は、同校が大正12(1923)年に編纂した『遊泳術教科書』に記載された、以下の引用を通して垣間見ることができる。

「昔は游泳術は他の剣道、柔道、弓馬術等と共に武藝の一つとして取扱はれたもので其精神教育の一助として之を授けたのは大に理のあるところである（中略）近來游泳は運動競技の一つに加へられ極東選手権競技大會或は萬國オリンピック大會にも水上競技として加へられて居る、従つて游泳を運動競技のみを目的として練習して居る人も澤山あるがこれ等も不知不識の中に護身、健身、養神に適つて居ることは運動精神を見ても明かである」²⁵⁾。

このように、「スポーツ」としての近代泳法をもってしても日本泳法と同じく精神教育の効果が得られるのだという。

(2)「教課目規定」に見る浜寺水練学校の能島流泳法

先で触れたように、浜寺水練学校は大正11(1922)年の名称変更に伴い、教授内容も近代泳法を多く採り入れ、日本泳法に関しては能島流中心に切りかえている。そのことを明確にすべく、ここでは前出の「教課目規定」に記載された同校の教授内容と能島流の泳法とを表1において見比べてみることにしたい。その際、能島流の泳法については、当流第17代宗家の多田一郎によって明治38(1905)年に著された『能島流游泳術』²⁶⁾に詳しいので、同書によってみていくものとする。

表1において浜寺水練学校の「教課目規定」に記された教授内容を『能島流游泳術』に照らしてみると、

表1 浜寺水練学校の教授内容にみる能島流泳法

「教課目規定」にみる浜寺水練学校の教授内容	『能島流游泳術』(1905)に該当する泳法及び項目
平体泳法	平泳
平潜水	水入・水入鰻飛
高飛び込み（直立・逆身・頭から飛び）	飛込・鰻落・中轉
クロール	
立体泳法	立泳・水歩
潜水	底息
横体泳法	（水府流太田派の一重伸・片抜一重伸）
浮身術	捨浮・安座・枯木流・筏流
足泳ぎ法（かもめ泳ぎ）	鴈方
手泳法（伝馬）	傳馬形
ハイダイブ	
水中作業	瓜剥・水書
溺水者救助法	溺水者救助法
人口呼吸法	溺者手当法
平体抜手一つ掻き 平体抜手二つ掻き	抜手
遠泳	
二つ掻き	二つ掻き
投水	
鰻飛	鰻飛
背泳	
各流派比較研究	
水上競技研究	游泳に関する諸技
手足しばり泳法	手足捌
遊泳史	游泳術の沿革
運動生理学大意	
遊泳に関する衛生学	衛生上の注意
遊泳に関する物理学	
遊泳教授法	

毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞浜寺水練学校80年史』毎日新聞大阪本社、1986、p. 67/多田一郎：『能島流游泳術』多田一郎、1905、1-52帖、より作成。

その大半が能島流の泳法に該当するものであり、同校においては明らかに能島流を中心とした指導が行われていたことがわかる。また、能島流だけでは対応しえない泳法については、他流派の泳ぎを採り入れている。例えば、「教課目規定」には「横体泳法」という種目が掲げられているが、能島流は平体が基本であるため横体の泳ぎは存在しない。そのため、浜寺水練学校では水府流太田派の一重伸、片抜一重伸などを採り入れたといわれる²⁷⁾。したがって、浜寺水練学校におい

ては、能島流を中心とするいうなれば「浜寺流」の泳法指導プログラムが編成されていたといえそうである。

3. 日本的群泳（楽水群像）の誕生とシンクロへの歩み

(1) 楽水群像の誕生

大正年間（1912～1926）は浜寺水練学校の基礎が確立された時期であった。浜寺水練学校はシンクロを導入した先駆けとして知られるが、その下地はすでに大正末期には築かれつつあったといえてよい。同校において教授されていた日本泳法を基にして、画期的な水中の団体演技（＝楽水群像）が創始されているからである。この「楽水群像」の考案者は、当時浜寺水練学校教授（女子部長）であった松本権雄である。そこで、楽水群像誕生に至る背景を探るべく、松本の回顧談の一節を次に引いておきたい。松本は大正6（1917）年に7カ月間海外留学をしていたが、その時に見た外国人女性ダイバーの美しいフォームを日本の水上界にも再現し、水上バレーを考案したいという夢を抱くようになったという。

「大正十四年（一九二五）、（中略）運動部長だった医博の木下東作先生の要請で浜寺の水練学校教授となった。当時わたくしは英文毎日の学芸ページの編集や欧米映画、宝塚歌劇などの批評を書いていたが、たまたま試写会でワーナー・ブラザーズの映画に水中ページの場面があった。ハリウッドからの大型スチルをよくみると、この場面はカメラ・トリックで、十人ほどの美女が白い水泳着をきて団体浮身をしている。この人間の花がぐるぐるとまわるのである。しかしスチルをさらによくみると、同数の他の女子らが両手で各人をささえて人間の花を浅いプールで浮かしているのである。そうしたカメラ・トリックで人間の花があたかも水上でまわっているように見えていた。わたくしは女子部長になったのを機会に、日本古式泳法（主として能島、水府、小池流）とクロールなどを組み合わせて「日本の印象」「オランダの印象」などという題の水中ページントを考案、女子部の水泳教師たちに団体指導した。これらの水中ページントの終わりには、これもわたくしの考案した蓮の花に丸く輪をえがく団体浮身を行った。」²⁸⁾

上記引用が詳細に語っているように、松本は留学時の見聞を契機として、ハリウッド映画からヒントを得て「楽水群像」を考案したのである。もしも松本に

よって、このハリウッド映画の「水中ページント」の内容が深くうなずかれていなかったならば、楽水群像は誕生の契機を失っていたかもしれない。また、上記の回顧談から楽水群像は考案当初より、能島・水府・小池流とクロールを組み合わせで行うという、日本泳法と近代泳法とが融合したものであったことが判然とする。

楽水群像が初めて一般公開されたのは昭和7（1932）年のことであった。この年の夏に宝塚に完成した50mプールで、浜寺水練学校の女性たちが華岡芳三の指揮の下に楽水群像を演じたのである。翌年8月15日の夜、当時水泳のオリンピック選手であった横田 操が宝塚歌劇団に入団した際にも楽水群像は公開され、プール両側のスタンドには約2,000人の観客が詰めかける大盛況であった。プールサイドと底は水中照明が当てられていたため、実に美しかったという²⁹⁾。

ところで、昭和7年の初の一般公開の前年、楽水群像の試行錯誤に立ち会った女性教師は、当時を次のように振り返っている。

「昭和6年の夏だったと思いますが、松本権雄先生が欧米出張から帰国され『米国では音楽に合わせて泳いでいるよ。女子部も何か工夫をしてみたら』といわれ、私どもは何をどうすればいいのか、皆で随分首をひねりました。結局、習い覚えた泳法を組み合わせで団体遊泳することにし、10人くらいで笛を合図に泳ぐ練習を始めました。運動会では『楽水群像』と名付け披露しました。私はもっぱら笛吹き役だったかもしれません。翌年夏、宝塚少女歌劇の真夏の夜のプールサイドでの公演に出演依頼を受け、学校の許可を得て、皆さんと一緒に参加しました。そのために本気で練習しました。」³⁰⁾

上記の回顧談から、松本が自らの意見にのみよらず、演技者とともに創意工夫を凝らして楽水群像を発展させていったことがわかる。また、昭和7年の宝塚での演技の際には、「笛」によって指揮されていた点にも注目しておきたい。

(2) 楽水群像の実際

以上の経緯をもって誕生した楽水群像であったが、これは実際にはどのような演技だったのであろうか。『浜寺水練学校60年史』の記述によれば、松本が考案し大正14（1925）年に初めて演じられた水中ページントは「日本の印象」という題目で、以下のような要領で行われたという（下線、引用者）。

「一、順次逆身で入水、中央に一列に泳ぎ出て円

- 型をつくり、平泳ぎで時計の針のよう動く方向に回転する。
- 二. 一同中心に向く。
 - 三. 立泳ぎで静止する。
 - 四. 立泳ぎで前進する。
 - 五. 立泳ぎで後退してもとの位置にもどる。
 - 六. 左へ時計の針の動く方向へ立泳ぎで進む。
 - 七. 右へ時計の針の動く反対方向へ立泳ぎでもどる。
 - 八. 一同中心を向いてスプラッシュして手をおさめる。
 - 九. 左を向いて円型に泳ぐ。
 - 十. 伝馬で左へ回転する。
 - 十一. 伝馬で右へ回転する。
 - 十二. 自由な方向にできるだけ早く回転する。
 - 十三. 止まれ。
 - 十四. 蓮の花の浮身の体型に入る。
 - 十五. 蓮の花の浮身をする。
 - 十六. バタ足で後退し、スプラッシュしつつ円型にもどりクロールする。』³¹⁾

以上が考案当初の楽水群像であるが、これを見る限りにおいては、初期の楽水群像は当時としては画期的であったにしろ、さほど複雑な演技ではなかったと理解することができよう。また、上記の演技解説に、初出の泳ぎに限って下線を付したが、このとき用いられた泳法は順に平泳ぎ・立泳ぎ・スプラッシュ・伝馬・浮身・バタ足・クロールであった。したがって、先の松本の回顧談にもあったように、初期の楽水群像は能島流の基本泳法と近代泳法が融合したものであったことが指摘されよう。

さて、楽水群像はその後いかなる変化を遂げていったのであろうか。昭和14(1939)年に楽水群像を演じた女性の回顧談に、当時における演技の一部始終が詳しく記されているので、以下に引いておこう(下線、引用者)。

「女子部を卒業したのち技術向上の一つの目標は楽水群像のメンバーになることでした。このメンバーの人数は約二十人ですが、わたくしはじめてこのメンバーに加えていただいたのは昭和十四年、助手のときで、晴れの明治神宮大会に出場した年でした。(中略) いっせいに笛の合図で逆身で飛び込み、クロールで円型をつくります。そしてあたかも水すましが輪をえがいているように、かるがると伝馬で左右に円をえがきます。その後かもめ泳ぎでかれんな波をたてながら前進して浮身にうつります。浮身は三人一組で行ないます。三

人の歩調がくずれると顔に水をかぶり『ガヤガヤ、ブクブク』と水中に沈み、笑いがとまらないこともありました。つぎは十字の体型になります。そして十字をくずさないで、かもめ泳ぎで円周をまわります。つぎはさっと体型が二等辺三角形の二辺に変わり舞鶴をします。舞鶴はぐっと水をけて体をささえる泳法のために足に力が必要です。このころになると足の力もだんだん衰えて『フー、フー』と荒い息づかいがあちこちから聞えてきます。もう一息とがんばります。つぎは平泳ぎで少しばかり休息をとりながら整列します。最後に歯切れのよい笛の合図で二つがきの拔手泳法をします。赤銅色の太い腕がいっせいに水面にぬかれる姿をみて観客は称賛の拍手をおくってくれます。』³²⁾

この時期になると考案当初に比して新たに多くの泳法が加えられ、水中での表現も多彩になっている。ここでも先ほどと同様に初出の泳法に下線を付したが、当時は逆身の飛び込み、クロール、伝馬、かもめ泳ぎ、浮身、舞鶴、平泳ぎ、拔手二ツ掻が用いられていたことがわかる。「立泳ぎ」が出てきていないが、この泳法も静止時などに少なからず用いられたはずである。考案当初は、水中でのポジションの移動には立泳ぎが多く用いられていたが、それから10年余りが経過して、かもめ泳ぎがそれに替わる移動するための泳法として用いられている。また、入水の方法もかつては「順次逆身で入水」であったものが、「いっせいに笛の合図で逆身で飛び込み」と変化している。これは、観客により美しく見せるために試行錯誤した結果であろう。文中にメンバーは約20人と記されていることから、楽水群像は比較的多人数で次々と水中に「円型」や「十文字」を描いていくような、いわば「マスゲーム」的な様相を呈していたと思われる。なお、当時も演技中の指揮は「笛」の合図をもって行われていたようである。

ところで、上記の回顧談の中に「舞鶴」という泳法が登場するが、これは『能島流游泳術』には記されていない技である。『能島流游泳術』は明治38(1905)年に多田一郎が著した書物であるので、おそらくそれ以降能島流において編み出された泳法であろう。そこで、以下に『図説日本泳法』の能島流に関する部分より「舞鶴」の解説を引いておこう。

「立泳の姿勢から両手を同時に半円を描いて体側からできるだけ後方に伸ばし、肘をまげて手で水をはねる。その両手を静かに前方に半円を描いて揃え、立泳の姿勢に戻る。要点は手で水をはねた



図1 昭和17(1942)年頃の楽水群像の様子*
* 毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞社浜寺水練学校
80年史』毎日新聞大阪本社，1986，p. 70，より
転載。

あと、立泳に戻る際に前進を続けることが大変むつかしく、また大切とされ、鶴の舞う感じを出すため、主として女子を中心に研鑽されてきた。³³⁾

図1の写真は昭和17(1942)年頃の楽水群像を撮影したものであるが、この泳ぎが「舞鶴」である。「鶴の舞う感じ」を表現したという見栄えのするこの泳法は、楽水群像において欠かせない技の一つとなっていたと思われる。また、上記の技の解説に「女子を中心に研鑽されてきた」と述べられていることからしても、「舞鶴」は楽水群像を少なからず意識して考案された泳法であると解されよう。

(3) 楽水群像からシンクロへ

① 高橋清彦による音楽の導入

楽水群像に一大転換期が訪れたのは昭和25(1950)年のことであった。この年の8月12日、戦後初の日米水上競技大会が大阪市営プールで開催されたが、このとき、高橋清彦が中心となって新たな楽水群像を世に送り出した。それまで「笛」の合図によって行っていた演技を、宝塚歌劇団の高橋廉の作曲した「音楽」に合せて泳ぐものへと変化させたのである。このときの様子を、高橋清彦は次のように記述している。

「昭和25年の第三回日米対抗水上大阪大会に、従来の浜寺水練学校の楽水群像を完全に音楽に合つたものとして出す案が出た。(中略)練習を初める前に外国で、どの様に行われているか知りたいのだが関西支部の方々も実際にそこまで知らないし、出入りの洋書屋で文献をあさる一方注文をして見たが、結局外国の真似をした所で僅か数ヶ月で立派なものが出来る筈がないと、浜寺水練学校は幸なことに明治の創立以来から一流一派に拘泥せず広く比較研究をして来たので教課目にもあり

日本泳法としての種類には事欠かないからそれ等を組合せて構成を決定してから新しくそれに対して作曲をして当日は音楽団の演奏によって演技を行うという大きな計画を立てたわけである。幸い(中略)毎日30余名が練習に出てくれ皆の技術の向上と共に構成上も新しいアイデアが生れ種々の障碍はあつたが、初の国際大会でもあるので各方面の援助も得られ、作曲も終り当日は大阪市音楽団の演奏で無事演技を行う事が出来たのである……」³⁴⁾

この高橋による音楽の導入をもって、楽水群像はよりいっそう「シンクロナイズド・スイミング」へと近づいていったのであり、ここに後年のシンクロの受容を容易ならしめる下地が整えられていたのである。楽水群像の考案者は松本梢雄であったが、これに音楽を採り入れ発展させた高橋清彦は、まさに楽水群像の「中興の祖」とでもいえる人物であろう。

しかしながら、松本がアメリカのシンクロと比較して次のように評しているように、楽水群像は未だシンクロとは異なる集団演技であったといわねばなるまい³⁵⁾。

「毎年夏のシーズンの終わりの浜寺水練学校の大会にわたくしの指導で水中ページェントの模範演技をした。どちらかというと、アメリカ式は立体的であるのに対し、わたくしの考案した日本式は平面的であるため、前者が少数で行う競技種目となっているのに日本式のは多数の参加が必要のため競技種目にはなり得ないと考えられる。」

したがって、楽水群像が単なる「見世物」の段階を脱して「競技化」への道を歩んでいくのには、日本におけるシンクロの本格的な受容を待たねばならなかったのである。

② 浜寺水練学校におけるシンクロの受容

日本に競技としてのシンクロが初めて紹介されたのは、昭和29(1954)年7月30日のことであった。在日アメリカ軍慰問のため、全米アマチュア競技連合シンクロナイズドスイミング委員長ノーマ・オルセン夫人率いるアメリカチームが来日し、東京の神宮プールでエキジビションを行い、さらに技術指導のために翌日講習会を催しているのである。

しかしながら、このアメリカチームによるシンクロの紹介に先立ち、浜寺水練学校ではシンクロの導入に着手しつつあった。すなわち、昭和25(1950)年の日米水上競技大会において、従来笛の合図で行われていた楽水群像を音に合わせたものにする際、高橋清彦が

「シンクロナイズド・スイミング規則」という AAU (全米体育協会) 発行のハンドブックを偶然にも手にしているからである。

この年の日米水上競技大会では、結局のところ音楽に合せた楽水群像を披露したに過ぎなかったが、それ以降、浜寺水練学校は高橋清彦の主動のもとシンクロの導入へと苦心を重ねていくことになる。その辺りの事情を高橋本人が記述しているので、以下に引いておきたい。

「大会一週間前に注文した洋書の内シンクロが競技として記載されているのを見た時には全く驚いてしまった。大急ぎで現役学生連中と翻訳を終え大会終了直後から練習に入ったが、あのルールブックの図だけでは到底こなせるわけではなく、実の所案外つまらないものだと言せざるを得なかった。

そこで翌年からは寧ろ日本泳法をシンクロの中に取り入れるべく練習を初めたが、本当の意味のシンクロには日本泳法は中々応用出来なくて、シンクロがウォーターバレーといわれた様に音楽と共に発達して来たバレーの型が入っているのであるから、あの殆んど水中ばかりの動作も当然の結果だと人にも話す様になった。所が28年頃になると実際に練習している連中が音楽に対する勘がよくなったのか、音楽で日本泳法をこなす様になってきたので、これはアメリカのルールブックに多くのスタンツを加える事が出来るとうぬぼれてしまったのである。」³⁶⁾

このように、高橋は大会直前に偶然にもシンクロの競技規則(=ルールブック)を入手し、直ちに学校をあげてシンクロ競技の解明に着手した。この時、翻訳作業は4人で分担し、1人が実技に挑戦したという³⁷⁾。しかし、競技規則とそれに付された挿図のみでは競技の全体像を把握することは不可能であり、高橋も楽水群像と比べて「実の所案外つまらないものだと言せざるを得なかった」のである。シンクロが元来音楽に合せて踊るバレエの要素を含んだ「ウォーターバレー」として発達したことからすれば、それまで笛の合図で動いていたに過ぎない楽水群像をシンクロ競技として発展させることは困難であると考えたのであろう。それでも苦心を続けているうちに、昭和28(1953)年頃の浜寺水練学校の選手は徐々に音楽に同調させて日本泳法を行うことが可能になっていった。

アメリカチームが来日してシンクロが実演されたのは、その翌年のことである。したがって、浜寺水練学校は日本にシンクロが本格的に紹介される以前に、あ

る程度のシンクロの基礎を確立していたことになる。

アメリカチームが来日すると、高橋清彦を含む浜寺水練学校のメンバーにもシンクロを実際に見学する機会がおとずれた。高橋は続いて次のように記述している。

「翌29年の7月に大阪に来られた藤田理事長さんから突然電話があり、シンクロが東京で公開されるので楽水のメンバーが上京出来ないだろうか」と急なお話で費用の点もあり、とに角5名をつれて上京する事にしたがアメリカのシンクロの協会長のノーマ・オルセン女史が来られたので、これはメッセージを持参せねばと思い前述の様な心境にあつた関係でシンクロの中に日本泳法から判定上も好都合な水面の動作である数多くのスタンツを導入出来ること、次いで審判上の種々の疑問及び昨年度とのルールの比較等を書いた。このメッセージは協会長のオルセン女史に関西で大いに練習しているかの如く思わせ、大いに驚かす結果となつてしまった。逆に泳ぎを見た我々はシンクロを成る程と感心して帰つたわけである。」³⁸⁾

こうして、高橋清彦を含む浜寺のメンバーは実際にシンクロを目にし、高橋はシンクロ協会会長のノーマ・オルセンと会見した。この時、浜寺のメンバーは翌日にオルセンが開催した講習会にも参加し、シンクロという競技を身をもって体験する機会まで得られたのである³⁹⁾。

オルセンは日本水泳連盟に数多くの資料を寄贈しているが、浜寺水練学校ではその諸資料の翻訳に取り組み、訳書に従って引き続き練習を積み重ねた⁴⁰⁾。そして、早くも昭和29(1954)年9月に奈良県天理プールで開催された国体において、浜寺水練学校の3選手が日本人として初のシンクロを披露したのである⁴¹⁾。

このように日本にシンクロが紹介されて間もなく浜寺水練学校がこれをマスターし得たのには、楽水群像の存在、紹介以前からのシンクロの研究、シンクロの実地見学およびその体験にも起因していよう。事実、高橋清彦が「実際に泳ぎ方を知ると今までルールブックで苦心していたので8月からの練習でこの年の天理の国体にAAUの規定に合ったものを初めて出せた」⁴²⁾と振り返っているのである。

ともあれ、以上の経緯をもって浜寺水練学校は競技としてのシンクロを受容するに至ったのである。

5. ま と め

本研究において検討した結果は、以下のように整理することができる。

1. 明治 39 (1906) 年, 毎日新聞社は日露戦争の勝利記念事業として南海電鉄沿線の浜寺に浜寺水練場と海水浴場を開設したが, この事業は女性が運動することに懐疑的であった社会にあって, 女性の水泳界進出に一役買っていたといえる。大正 11 (1922) 年に「浜寺水練場」は「浜寺水練学校」と改称されたが, このとき, 教授内容にも改めて検討が加えられ, 能島流を中核に据えた教授内容へと変更された。
2. 浜寺水練学校で教授されていた日本泳法は能島流が中核を占め, それと併せてクロールをはじめとする競泳のための近代泳法が教えられるようになったが, ここに, 同校における日本泳法と近代泳法との融合を見て取ることができる。また, 改称に伴い定められた「教課目規定」に記された教授内容を, 能島流の泳法に照らしてみると, 同校においては明らかに能島流を中心とした指導が行われていたことがわかった。
3. 大正 14 (1925) 年, 浜寺水練学校の女子部長であった松本権雄は同校で教授されていた日本泳法を基にして女子教員に笛の合図や号令で水中の集団演技を行わせたが, この「楽水群像」は当初より日本泳法と近代泳法とが融合したものであった。考案当初の楽水群像はさほど複雑な演技ではなかったと推されるが, その後昭和 14 (1939) 年の演技構成をみると, 入水の方法や移動に用いた泳法などに変化が見られ, 「見せ物」であることを意識して試行錯誤が行われた跡がうかがえた。この時期の楽水群像は, 比較的多人数で次々と水中に円形や十文字を描いていくような「マスゲーム」的な様相を呈していた。
4. 昭和 25 (1950) 年, 戦後初の日米水上競技大会が大阪市営プールで開催されたが, このとき, 高橋清彦が中心となって新たな楽水群像が世に送り出された。それまで「笛」の合図によって行っていた演技を, 「音楽」に合せて泳ぐものへと変化させたのである。この高橋による音楽の導入をもって, 楽水群像はよりいっそうシンクロへと近づいていったのであり, ここに後年のシンクロの受容を容易ならしめる下地が整えられていたといえよう。
5. 競技としてのシンクロが初めて日本に紹介されたのは昭和 29 (1954) 年のことであったが, このアメリカチームによるシンクロの紹介に先んじて, 浜寺水練学校ではシンクロの導入に着手しつつあった。その経緯として, 昭和 25 (1950) 年の日米水上競技大会において音楽を導入した楽水群像の演技が試みられた際, 高橋清彦が偶然にも

AAU (全米体育協会) 発行のシンクロのハンドブックを手にし, 学校をあげてこの競技の解明に取り組んでいたことが確認された。昭和 29 (1954) 年 9 月には奈良天理プールで開催された国体において, 浜寺水練学校の所属選手が日本人として初のシンクロを披露した。

注記および引用・参考文献

- 1) このことについて, スポーツ人類学の方面からは次のような見解が寄せられている。「人体の基本構造は地域や民族ならびに文化にかかわらずすべての人びとに共通するものであり, いかなる文化のもとでさまざまな動きをしようとも, 人体の動きは構造によって規制されているのである。」(大迫正文:「身体構造に規制される動き」『スポーツ人類学』明和出版, 2004, p. 31) したがって, 本研究で検討する泳法の問題にしても, その技術は人体の動きを規制する生物学的所与性の許容する範囲内で行われているものであることをここで確認しておく。
- 2) 日本泳法とはわが国古来の水泳術のことで, 近世において武術の一つとして発達したものである。『武芸流派辞典』によれば, かつて高名ながら今日では実体が明らかでないものや, 一流派の分派に過ぎないものなども合わせると, 泳法流名の数は 90 にも達するという(綿谷 雪・山田忠史編:『武芸流派辞典』東京コピー出版部, 1978, p. 686)。こうした日本古来の泳ぎの技法は, 従来, 古式泳法ないし流派泳法などとも称されていたが, 現在では日本泳法という呼称に統一されている。しかし, 流派で由緒正しく今日までに伝承されているものは 12 流派であるとされている。すなわち, 水府流水術・水府流太田派・向井流・観海流・小池流・岩倉流・能島流・水任流・神伝流・小堀流踏水術・山内流である。この 12 流派は「日本泳法」として日本水泳連盟に正式に認められているものでもある。本研究において「日本泳法」という呼称は, とくに断りが無い場合には上記の意味で用いるものである。
- 3) 能島流は小池流・岩倉流とともに「紀州三派」と謳われた和歌山藩の泳ぎである。その起源は能島流第 17 代宗家の多田一郎が明治 38 (1905) 年に出版した『能島流游泳術』に, 「(芸州倉橋島の名井豊前守重氏の曾孫重勝が一引用者注) 寛文九年八月我紀伊に來たり南龍公に仕へ, 傳來の秘書作法水具等を公の覽に供す, 公大に之れを賞せられき, 是れより世々游泳指南の職を奉じたりしが, ……」(多田一郎:『能島流游泳術』多田一郎, 1905, 2 帖) と記されていることからすれば, 寛文 9 (1669) 年に求めることができよう。能島流は本来海賊流戦法で, 伝書の主要なものはすべて水軍の戦術書であった。しかし, 水軍戦士に必要な武術としての泳法がこれに伴い研鑽されて, のちに水軍と離れ能島流遊泳術として伝わり, 現在に至ったものとされている(白山源三郎編著:『図説日本泳法』日貿出版社, 1975, p. 116)。

- 4) 浜寺水練学校編：楽水群像—楽水群像（楽水）の創始—「第41回日本泳法研究会資料『能島流』」浜寺水練学校，1992，p. 1.
- 5) その活動については，大日本武徳会武道専門学校によって昭和10（1935）年に編まれた「学校記事（其七 游泳術）」（『大日本武徳会研究資料集成第四巻』本の友社，2005，pp. 255-319）を参照されたい。
- 6) 白山源三郎：シンクロナイズド・スウィム「水泳」第101・102号，日本水泳連盟，1954. 8，p. 59.
- 7) ただし，シンクロに関する技術史的な論稿としては，シンクロが日本に受容される過程において「和」と「洋」とがいかに関融合され，日本の水泳界で市民権を獲得したのかを「能島流泳法」を通して検討した拙稿をあげることができる（藤丸真世：泳法にみる「和」と「洋」—シンクロナイズドスイミングの技を考える—「Sports Just」423号，三省堂，2005. 12，pp. 22-23）。しかしながら，拙稿は史料の詳細な検討によって論じたものではない。
- 8) 松沢洋子：「シンクロナイズドスイミング」『現代スポーツ百科事典』大修館書店，1970，pp. 268-270.
- 9) 中野成章：「シンクロナイズド・スイミング」『スポーツ大百科』スポーツ大百科刊行会，1982，pp. 161-162.
- 10) 日本水泳連盟シンクロ委員会編：『シンクロナイズド・スイミング』大修館書店，1984，pp. 1-8/『シンクロナイズドスイミングの手引1990（改訂版）』（「シンクロの歴史」の項）日本水泳連盟シンクロ委員会，1990，pp. 2-4.
- 11) 齊藤中子：「シンクロナイズド・スイミングの現状と発展」『現代体育・スポーツ体系 第14巻』講談社，1984，pp. 142-144.
- 12) 元好三和子：「シンクロナイズドスイミング」『最新スポーツ大事典』大修館書店，1987，pp. 445-448.
- 13) 岸野雄三・多和健夫編：『スポーツの技術史』大修館書店，1972，p. i.
- 14) 岸野雄三：「スポーツの技術史序説」『スポーツの技術史』大修館書店，1972，p. 14.
- 15) 金子明友：「運動技術論」『序説運動学』大修館書店，1968，p. 109.
- 16) 「毎日新聞」明治39年6月15日付.
- 17) 毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞 浜寺水練学校80年史』毎日新聞大阪本社，1986，p. 64.
- 18) 同上書，pp. 64-65.
- 19) 同上書，p. 60.
- 20) 木下秀明：『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』日本体育会，1973，p. 446.
- 21) なお，浜寺水練場（学校）に正式に女子部が誕生したのは，大正12（1923）年のことであった（毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞 浜寺水練学校80年史』毎日新聞大阪本社，1986，p. 67）。
- 22) 毎日新聞大阪本社編：『泳ぎ 毎日新聞社 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，p. 9.
- 23) 浅見俊雄・宮下充正・渡辺 融編：『現代体育・スポーツ体系 第14巻』講談社，1984，p. 195.
- 24) 毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞 浜寺水練学校80年史』毎日新聞大阪本社，1986，p. 67.
- 25) 浜寺水練学校編・中尾 保著：『游泳術教科書』大阪毎日新聞社，1923，p. 6.
- 26) 多田一郎：『能島流游泳術』多田一郎，1905.
- 27) 毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞 浜寺水練学校80年史』毎日新聞大阪本社，1986，p. 119.
- 28) 松本植雄：「水中の花を咲かせた喜び」『泳ぎ 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，pp. 90-91.
- 29) 毎日新聞大阪本社編：『泳ぎ 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，p. 89.
- 30) 毎日新聞大阪本社編：『毎日新聞 浜寺水練学校80年史』毎日新聞大阪本社，1986，p. 71.
- 31) 毎日新聞大阪本社編：『泳ぎ 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，pp. 88-89.
- 32) 同上書，pp. 90-91.
- 33) 白山源三郎編著：『図説 日本泳法』日貿出版，1975，p. 120.
- 34) 高橋清彦：シンクロへの歩み「水泳」第107号，日本水泳連盟，1955. 11，p. 50.
- 35) 松本植雄：「水中の花を咲かせた喜び」毎日新聞大阪本社編『泳ぎ 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，p. 91.
- 36) 高橋清彦：シンクロへの歩み「水泳」第107号，日本水泳連盟，1955. 11，p. 50.
- 37) 毎日新聞大阪本社編：『泳ぎ 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，p. 76.
- 38) 高橋清彦：シンクロへの歩み「水泳」第107号，日本水泳連盟，1955. 11，pp. 50-51.
- 39) 日本水泳連盟編：『水連四十年史』日本水泳連盟，1969，p. 119.
- 40) 毎日新聞大阪本社編：『泳ぎ 浜寺水練学校60年史』毎日新聞社，1966，pp. 76-77.
- 41) このとき，楽水群像や浮身，手足しほりも同時に公開され，初めてテレビ中継された（日本水泳連盟編：『水連四十年史』日本水泳連盟，1969，p. 120）。
- 42) 高橋清彦：シンクロへの歩み「水泳」第107号，日本水泳連盟，1955. 11，p. 51.